

もくじ 俳諧活動を物語る《書画貼交屏風》1P

じ 昭和二十五年頃の東洲江小学校 二 2P 行政文書に見る足立区の水害記録(三) 3P



図1《書画貼交屏風》 昭和時代初期 六曲一隻 当館蔵

文化遺産調査による修復資料
俳諧活動を物語る《書画貼交屏風》
小林 優

■俳諧と画の貼交屏風 図1に掲げたこの屏風は、かつて千住柳町で遊郭を構えた家に伝来し、同家のご厚意により博物館へ寄贈となった三隻の屏風(六曲一隻と六曲一双)の内の一点です。全体で一つの画面を構成する通常の屏風形態や、一扇ずつに一つの絵を貼り付ける「押絵貼(おしえり)」といった形式とは異なり、色紙や扇面など様々な媒体を散りばめる「貼交(はりまぜ)」の手法がとられ、高さ一七〇、幅三二〇センチの屏風の中に画や俳諧のかかれた十四点の色紙、二点の扇面、二点の短冊が貼り交ぜられています。

郷土博物館では、文化遺産調査をはじめとする調査活動によって多くの歴史・美術資料を確認し、またそれによって足立地域における、江戸時代以来の豊かな文化活動を明らかにしてきました。そして、こういった調査と合わせて行ってきたのが、調査の過程でご寄贈頂いた資料等に対する修復・保存の処理です。地域によって継承されてきた大切な資料を次代へと引き継いでいくため、博物館では毎年、計画的に資料の修復を行っています。

この屏風が作られた正確な年代は定かではありませんが、第一扇上段に貼られた俳人、九世其角堂田辺永湖(きかくどうたなべえいこ、一八八四―一九四五)の扇面俳画(図2)には「昭和己卯 迎春 其角堂永湖」の款記が記されており、少なくとも昭和十三年(一九三八)以降に屏風として仕立てられたものであることが分かります。

また、各作の作者についてはまだ検証が必要な部分がありますが、画においては正から昭和にかけて活動した矢沢弦月(やさけげんげつ、一八八六―一九五二)など、明治から昭和を通して活動した日本画家の作が見受けられる他、俳諧に関しては、特に前述の

図2 九世其角堂田辺永湖
俳画「南船と北馬の祭と初日影」
昭和13年(1938) 紙本着色



図 3 屏風下部 清記用紙の貼り交ぜ

九世其角堂永湖の俳画が扇面二点、色紙一点（一扇上・中、二扇中）と複数点確認される他、永湖の父である八世其角堂田辺機一（たなべきいち、一八五六―一九三三）の短冊一点（五扇中右）が見られ、多様な画家・文人たちの書画作に彩られつつも、この屏風の構成に、芭蕉門下である宝井其角の系譜を引き継ぐ、其角堂の系統が意識されていることを窺わせます。

■俳諧活動を窺わせる屏風の仕立て
其角堂の系譜は、特に明治以降、千住とも縁の深いものとなっていました。もとより千住は、松尾芭蕉の『奥の細道』の矢立はじめの地となつて以降、建部巢光が同地の俳人たちを束ねて俳諧団体「千住連」を結成するなど、俳諧の隆盛地ではありま

したが、明治後半には、千住の接骨医である名倉家の第四代当主、名倉彌一氏が、機一の前代、七世其角堂穂積永機と共に俳諧活動の輪を広げていたのです。

その後、千住では新派俳諧の高浜虚子、池内たけしに師事した蔬菜問屋主人の為成善太郎（号・菖蒲園）が虚子を招いての「やっちゃば句会」を催し、昭和のはじめから戦後まで句会の運座を行いました。機一・永湖の書画作を多く含むこの屏風は、やっちゃば句会とほぼ時を同じくして、柳町遊郭で其角堂の系統を嗜好した俳諧活動が行われていた可能性を窺わせます。それを如実に物語るのが、本屏風の下部に施された、句会で実際に使用したであろう清記用紙（句会で参加者の句を選句用に各人が書き写したものを）を貼り交ぜた、特徴的な仕立てです。

本屏風の下四分の一には「題」「結」と共に八つの句の付された「翁吟社」という団体名の印字のある清記用紙が、折り重なる様に貼り付けられ（図 3）、装飾とされています。この「翁吟社」については不詳ですが、屏風を伝来した家の明治から昭和にかけての当主は、いずれも俳諧を好んでいたとのことであり、彼ら当主が参加していた団体であると推測されます。また、このような特徴的な装飾に際して全く無関係の用紙を使用す

るとは考えづらく、恐らくは彼ら当主自身やその周辺で実際に使われた清記用紙を使用し、表具師へと依頼して装飾として貼り交ぜた可能性が考えられるのです。

本屏風の依頼者が果たして機一・永湖と直接の子弟関係にあったのかは未だ検証の必要がありますが、屏風に貼り込まれた用紙は膨大な数であり、また筆跡にも差違が見られることから、旺盛に句会に参加し、またあるいは、自身の遊郭を会場として句会を催していた可能性すら彷彿とさせるのです。

江戸時代以来、美術文芸の文化を育み続けた足立地域ですが、その背景の一つとしてあったのが、地域に深く浸透した俳諧への親しみでした。本屏風は、そのような俳諧活動の昭和初期における一つの展開を垣間見せるものであり、今後益々の調査を行っていきます。

（当館学芸員）

昭和二十五年頃の

東洲江小学校 二

渡邊梅子

※前号に続き、昭和二十五年に新卒で東洲江小学校に赴任された渡邊先生のお話です。

【楽しい遠足】

学校では、年中行事が決まっていました。四月の入学式、始業式、全校遠足、家庭訪問、学年ごとの遠足、夏休み、運動会などです。特に、桜のお花見と写生を兼ねた学校近くの中川の土手への遠足は、新しい学年が始まったばかりの行事でもあり、引率の難しさを学んだ行事の一つでした。この当時のクラス分けは、今では考えにくいのですが、住んでいる地域毎にクラス編成がなされていました。大谷田から通っている組、佐野から通っている組、谷中の組、加平の組のような編成でした。

その年の四学年の遠足は、本土寺（千葉県松戸市）へアジサイを見学に行きました。学校に集合して当時の世良校長先生を先頭に、一組の担任で学年主任の小野正雄先生と続いて、私は四組なので後ろでした。後になって気が付いたのですが、なぜか遠足には一番後に担任を持たない白水（しろうず）先生、養護担当の下田先生もついてきてくださいました。現代では、先生方の働き過ぎが問題になっていますが、この当時の学校には、担任を持たない、かなり自由な立場でご発言が許される先生方が在籍し、困ったときには遊軍の役割を果たしてくれていたような印象を持っています。昭和のこの時代

は、学校教育ができていいるとは言っても、まだまだ試行錯誤があつて、先生たちも苦労していたようにも感じています。

遠足も無事に終わり亀有駅で解散の際に、白水先生の音頭で恒例行事となつていた万歳三唱を行いました。子供たちは、大谷田の子も、佐野の子も、谷中の子も、加平の子も勿論、蒲原の子もそれぞれ歩いて帰りました。昔の子は、足腰が強かつたですね。

私達(教職員)は、学校へ無事遠足が終わったので反省会と称して宴



昭和 34 年ころの遠足
旗を持つ私(渡邊先生)と当時の校長先生

会です。校内での宴会ですので、今だったら教育委員会から厳しく指導されるところです。でも、その当時は、大きな行事の後は、反省会と称した職員室での宴会が恒例でした。宴会(ではなかつた反省会)は、会費を集められる訳ではなく、学校に戻ると用務員さんがアルコールを含む食事の準備もしてくれていました。今、思うと学校行事(運動会、学芸会、遠足等)で戴いた学校への寄付を有効(?)に活用していたようでした。

この反省会が始まったところ学校へ一本の電話が入りました。小金井駅からでした。聞いてみると『お宅の学校の子供が一人いる』との事。一人の生徒が、取り残されてしまったようでした。さあ、大変! 担任がすぐに駅に向かい、その子連れ戻しました。赤い顔した生徒が、取り残された生徒を迎えに行くという構図は、今ではすぐに SNS で拡散でしょうね。

駅前での万歳三唱はなんだつたのでしょうか? 昔々ののどかなお話です。

【家庭訪問】

毎年、五月中旬から家庭訪問週間が始まります。各クラスの担任は、通学路、家庭の様子を見るために家庭訪問を行っていました。クラスは、住んでいる地域ごとに編成されていましたから、家庭訪問は限られた地域だけで完結できましたので助かりました。私のクラスは、谷中地区で農家も多く、五月中旬と言ったら田んぼ、畑の一番忙しい時季なので、農家ではお父さん、お母さんにはお会いできませんでした。そのかわり、おばちゃんが残っていてくれました。おばちゃんにとって目に入れても痛くない孫の先生が、様子を見に来てくれるというわけですから、歓待されない訳がありません。帰りには、手作りの柏餅、おはぎ、お赤飯まで持たせて頂いたのを覚えています。今では、これも問題でしょうね。

つづく

元東綾瀬小学校教員

行政文書に見る

足立区の水害記録 (三)

山崎尚之

■「荒川出水々量調 附日誌」【二】

『明治四十年起 出水書類 南足立郡役所』の中には、「明治四十年

八月廿四日 荒川出水々量調 附日誌」と書かれたひとまとまりの記録があり、荒川の水量の増減記録と「当庁前悪水堀増水調」、それに八月二十一日から九月六日までの出来事が「日誌」という名目で記録されています。水量増減記録は、一時間ごとの千住大橋際での出水量と郡役所前排水堀の出水量の記録で、刻々と変化していく出水量が書かれています。水量が減っている時もありますが、これは荒川が潮汐の影響を受けているためと思われます。ご存知のように荒川は満潮による海水の浸入があり、そのために農業用水に利用できず、南足立郡では利根川から取水した見沼代用水や葛西用水をわざわざ利用しています。この中の「日誌」が、洪水に対処する郡役所や関係者(主に郡長)の動きが見られる興味深い部分です。

順を追って「日誌」部分を見ていくことにします。まず、八月二十二日から二十八日まででは降雨(騒雨)が続いています。

■綾瀬川の決壊と警官の派遣

その中の二十六日午前六時五分に南葛飾郡南綾瀬村東岸(現在の葛飾区小菅・堀切附近)の綾瀬川が決壊します。午後三時には前回に書いたように埼玉県のに辻村(現在の川口市坂下町附近)で芝川が決壊し、江北村よりその報告があります。綾瀬川

の決壊は、荒川増水の影響が考えられます。荒川が増水すると芝川に逆流し、あふれた水が毛長堀に浸入し、そこから綾瀬川に流入してくることでありました。この決壊への対応として、これも前回に書いたように梅島村・淵江村が堤防を防禦するための援助に人夫を出動させています。

二十七日は午後三時に工兵の来援がありました。「日誌」には来援があったと一行のみしか書かれていませんが、当時の『都新聞』八月二十九日条を見ると、南綾瀬村の決壊堤防工事に赤羽工兵隊員一二〇名が来援して終夜作業で応急工事を行ったことや工事用の材料がないこと、荒川の水が逆流してくるために難工事であったことが書かれています。この工事は昼夜兼行で三十日まで続けられたと『都新聞』九月二日条は伝えていきます。また、同時刻の午後三時すぎに東洲江村の助役が来て「水上防上二付下村ノ反対ヲ訴フ」と書かれています。河川の氾濫対策について下村（個人名か地域名かは不明）は反対の意見を訴えているようで、これを警察署に伝えたところ、警察署長は巡查を率いて東洲江村に出張しました。警官が出動せざるをえないようなトラブルが発生する兆候があると郡役所は捉えて、警察署に連絡をとり、警察署は巡查を派遣したということが考えられます。

江戸時代以来、洪水（堤防の決壊や溢れた水の乗り越え）は、人命への脅威、住居や農作物への浸水による被害を引き起こすため、堤防から水が溢れそうになると、それを防ぐため土俵（つちたわら）で嵩上げをしました。しかし、こちら側の堤防を嵩上げすれば対岸の堤防を洪水が乗り越えるということが起こるため、堤防の嵩上げやその撤去をめぐり、川を挟んだ住民同士の争いを発生させてきました。洪水の発生や堤防の決壊については、このような過去の記憶もあったために警察署長の出張ということになったのではないかと思います。警察署長は午後八時過ぎに帰ってきて、「反対ノコトモ格別ノコトニアラス」と報告しています。特にトラブルは起きなかった（回避された）のでしょうか。（しかし、残念ながら二十九日には花畑村と梅島村の村民が「溢れた水の堤防乗り越え」をめぐる衝突してしまっています）。

午後三時にはもうひとつ、先ほどと同じ埼玉県のと村の決壊場所を「急水工事」することを東京府知事に要望したところ、直ちに承諾され埼玉県に照会するように命じられています。元を何とかしなければ洪水は止まらないという考えから、またも県境を超えて堤防の修復工事に向

かおうとしたのでしょうか。

■南足立郡病院の浸水

夕方には、郡役所（現在の千住の芸術センターの場所にありました）前の堀が徐々に増水してきて、深夜二時には裏門前が浸水したと書かれています。この他にも、この日は西新井村長と救助の打合せを行い、郡役所職員が救助のことで伊興村や舍人村などに出張しています。また、舟で救助をするようになったと助役から報告を受けています。同じ深夜二時には南足立郡病院の院長がやってきました。この病院は現在の千住大川町の千住公園にあった病院で、伝染病の避病院として当時は千住の人びとが多く住む場所から離れた田の中に建っていた病院です。昭和十一年（一九三六年）に現在の文京区本駒込の都立駒込病院の場所に移転しました。『読売新聞』八月三〇日条によると、ここも溢れた水による床上浸水のため三段に重ねたベットに患者は横たわっていると書かれています。

二十八日は前夜から大雨だったのが朝には止んで晴れました。内務省の技師の視察や東京府の内務部長などの来庁（舟での視察がありました。この日の午前二時ごろからの郡役所前での増水によって午後四時ごろには土台石から約十五センチメートル、深夜には約三十六センチメートルま

で浸水したと言います。

（当館専門員）

関連講演のお知らせ

企画展

「戦国足立の三国志」

・宮城氏・舎人氏・武蔵千葉氏
（会期：3月19日～5月6日）

開催中の企画展に関連し、専門の研究者による講演会を開催します。

まだまだ謎の多い足立の戦国時代について、最新の研究成果をもとにお話しいただきます。この機会にぜひご参加下さい。

4月21日(日)

新井浩文氏

（埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員）

「岩付太田氏と

その家臣たち」

4月28日(日)

久保田昌希氏

（駒沢大学教授・前副学長）

「戦国時代の全体像と足立」

両日とも、午後2時～午後3時30分（開場は午後1時30分）。先着80名、参加費無料。会場は当館講堂。事前申し込みは不要です。当日、博物館受付でお申し出下さい。